（本號十二頁）　（毎月三回發行）　明治三十三年八月五日　第四千九百七十七號　（定價金二錢五厘）

時事新報

明治三十年八月五日
木曜日
（乙未）
舊曆丁酉七月七日
日出　午前四時五十三分
月入　午前六時四十二分
月出　午前十二時六分
月入　午後十時三十九分
滿潮　午後十時五分
西曆（千八百九十七年）二百十七日
年初より年末まで　二百四十八日

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には倫敦特電あり世界の大事を速報す　時事新報社

弊店製造品は堅牢美麗高尚にして能く養用に適す

◉旅行用化粧道具品
◉近年流行絨氈製鞄

◉電話本局千〇六十一番
京橋區南傳馬町一丁目　鞄繪屋本店
同　二番地　鞄繪屋支店
同　一丁目　鞄繪屋大鞄店
京橋區尾張町二丁目　鞄繪屋鞄店

◉二階ハ大鞄陳列所ニ付御縱覽ヲ乞フ

◉小僧三名至急入用望みの方は御來談あれ

燒殘品入札賣却廣告

一茶牛皮瀏茶牛皮生皮其他各種
以上入札保證金ハ任自御見積代金百分ノ二十トス
右賣却仕候ニ付御望ノ方ハ來ル八月五日ヨリ九日迄毎日午前九時ヨリ午後四時限現品及契約方御縱覽ノ上入札保證金相添ヘ入札書御差出相成度十日正午十二時限開札仕候
明治卅年八月一日
東京本所區押上町
辻組製革工場

◉診察廣告
肺病、氣管支病、腸胃病、腦神經病及心臟病等ヲ診察ス
（接見毎日之午前一ノ十一（川崎））
大岡内科醫院

時事新報第一紙面
廣告料一行金二十五錢
時事新報紙面の廣告一般新聞紙の廣告に比して幾層有効なるは今更申す迄もなく殊に其第一紙面は他の紙面に倍して効能顯しきよく廣告主の紙面に掲載方依頼の向多く其部數輸送に苦しみを感ずるに依て第一紙面に限り廣告料を特別に定めたり

社說

官吏の俸給を增す可し

二種の事情より政費の增加は到底免る可らず第一は所謂戰後の經營にして軍備を始め教育、外交、交通等の諸機關は總て擴張せざるを得ず爲めに費用を要するは勿論なり第二は即ち物價の騰貴にして從來一圓の品が一圓五十錢と爲りしが如きなれば政府が物を買ひ人を雇ふにも自から多額の錢を出さゞるを得ず今暫く官吏の俸給に就て論ぜんに一昨年末の調査に依れば全國官吏の總數は四萬六千六百九十八人にして其年俸總額は千百四十萬四千八百餘圓なり之を月給に直して頭數に割當れば一人平均二十圓三十五錢にして日給にすれば六十七錢餘に過ぎず其後人員に於ても又俸給總額に於ても多少の異同を生じたるのみにして獨り別に俸給例改正の沙汰もなければ其平均額は矢張り前日の如くなる可し左れば增給は目下の必要なる次第を云はんに明治二十三年の官吏總數は五萬三百六十七人にして其年俸總額は千百九十七萬六千百十六圓なれば每人の平均月給額は十九圓八十一錢餘なり之を今日に比するに僅に五十四錢の差あるのみ爾來物價は凡そ二倍と爲り職工人足の賃錢も相當に騰貴したるに獨り官吏の給料のみ舊來のまゝにて辛抱し得べきに非ず目下大工左官の手間賃は凡そ七十錢にして石工は一圓、普通の人足にても四十錢を下らず車夫の如きも日に七八十錢より一圓を得るみと少なからずと云ふ左れば官吏の給料は車夫又は大工左官にも及ばずして僅に土方人足の上に在るのみ相應の教育を受け文筆を以て衣食するものにして其得る所職人輩にも及ばずとは誠に不思議なる現象にして人事の變態と認めざるを得ず尙ほ試に或る私立銀行の月給額を聞くに上は頭取より下は小使迄で平均して凡そ二十九圓にして之に賞與を合算すれば一人の收入五十圓に近しと云ふ亦以て官吏俸給の安きを見る可し俸給安ければ勉强も亦少なし羸れには月給の多少に拘はらず眞面目に奉公する者もある可し雖も例外は一般を律するに足らず沼々たる多數は錢の乏少に依て動くの常にして害吏も亦普通の人間なれば人間並に相應の錢を給與して安堵せしむるみを肝要なれ無理を犯せば必ず弊あり民間の氣色は春の如くなるに獨り官海をして獨て冬たらしめんとせば少しく無力ある者は費飛出して共に春を樂まんとし留る者は只老朽の輩のみと爲る可し假令ひ實際辭職するものは多からずとするも一旦その壯會に脫走の風を生ずれば全體爲めに動搖して何人も腰を据ゑて仕事するみと能はず自から事務の滯淀を免れざる可し又官吏とて人に貴き者に非ざるは勿論なれども兎に角に人を支配す可き權能に立つものなれば職人輩と異なり相當の區別を保たざる可らざるに其給料は實際半減せられたるを同樣にして衣食にも不自由を感ずるに至れば風儀も自から亂れざるを得ず事務は滯淀して風儀は亂る政府の最も惡しきものと云はざる可らず一歩を讓て假に上級官は今の給料にて辛抱し得可しとするも下級の輩に至ては迚も堪ふ可らず現に遞信部内の如きは人を雇ふみと能はずして通信機關の運轉、滯ならざるに非ずや俸給の改正は目下の急務にして政費の增加は自然の數なり一方には政費を增すの必要ありて他の一方には國民に負擔の餘力あるに尙は何を苦んで增稅を斷ぜざるか斷じて行へば鬼神も避くると云ふ我輩は返へすゝも當局者の奮發を促すものなり

○後藤伯逝く

久しく病氣中なりし後藤伯は環てより不治の病性と聞みえしが去る二日の朝より容體特に宜しからず心臟麻痺の兆あるより醫師は百方之を防き止むるみとに手を盡せしも其効なく一昨夜に入りてより益々危篤に迫り僅かに麻睡劑を用ひて一縷の命脈を維き居たるのみ終に昨日午前八時十分を以て憑焉死去したり伯は天保九年三月の生にして享年六十歳なり

○後藤伯の昇敍

後藤伯病危篤に付一昨三日特旨を以て位一級を進められ正二位に敍せられたり（以上二件昨日號外再錄）

○栗本醫學士の狂犬病談（承前）

注射法の研究　試驗の結果遂に病毒が兎に感ずると云ふみとは分りましたが此狂犬病に罹つた患者を助ける方法は只佛蘭西のパスターの遣る注射法の外には今日の所では治療法はないと云ふみとでありますからして此注射法が充分に出來たならば多數の患者を救ふみとが出來るみとに決心した次第であります

みとに決心して往つて研究した次第であります

して遣るか其方法に試驗するより外なしと

に試驗するより外なしと

を極駈くして健康

々病毒の量を增し

注射して見たが

兎に初から强い病毒

が併し弱い病毒を

云ふみとが確かに

毒を豫防するみと

すな

始めて注射法を

暮れて二十七年

したが撥う長崎

つたので治療を

故後藤象二郎伯

が福岡縣の博多

は私が人體に本

す、此人は狂犬

會もしたさうで

私に治療を受け

けやうみと云ふ

い處で親戚の者

出來るものでな

んと云ふ、併し

ものだから私

夏の事で其頃は

華帽も出來て

みたです、鄰人